

TAKE FREE

森の夜を愉しむ。
The Ordinary Night

BLUE+ GREEN JOURNAL

Okutama Town Official Magazine

奥多摩町公式タブロイド

02
Second ISSUE

THE Ordinary night

森の夜を
愉しむ。

面積の94%を森林が占めるこの町の夜は、深くて濃い。

ネオンの光にも高層ビルにも邪魔されない漆黒の空と、無数の星々。

肥沃な森では、そこに暮らす動植物が、知られざる表情を覗かせ始める。

この町の住民たちは、知っている。これこそが、心地良い夜の姿なのだと。

さあ、今夜も愉しもう。東京での、東京らしくない、静謐で奥深き森の夜を。

登山客や物見遊山に来た人々で賑わう色鮮やかな奥多摩の風景。ところが夜になると途端に色彩は失せ、闇が森を覆い、無音の世界が急速に拡がっていく。都会のそれは全く異質なほど、暗く、寂しくも思える静かな夜だが、その実、この町の住人はそんな時間が嫌いじゃない。周囲には、時折聞こえる動物や虫たちのかすかな鳴き声や、風や川が奏でる音。研ぎ澄まされる五感によって、思考は冴え、趣味や仕事に向かう集中力も増す。誰にも邪魔されない静謐なひとときは、自然に囲まれた奥多摩ならではのもの。星間には味わえなかった魅力が、夜になると確かに感じられる。

そんな夜の愉しみ方は人それぞれであ

るが、まず目を向けたいのは満天の星空だろう。そこで僕らは、ちょっとした夜の冒険に出かけた。青梅街道を車で西へ進むと、闇がどんどんと深くなるのに気づく。鳩ノ巢のワインディングを抜け、奥多摩駅をバス。さらに日原街道を走りながら高度を上げていくと、星空の輝きは増し、山間の集落から見える灯りもあいまって、まるでメルヘンの1シーンのような光景が辺りには広がっていた。次の夜は天空の山村とも言われる峰谷、その次の夜はテントを持って東京都下最高峰、標高2017mの雲取山へ。それぞれに異なる星空の風情を愉しみながら、毎夜のように続いた星空ツアー。最後の夜は、奥多摩でも最も星観察に適する場所の

1つだと耳に挟んでいた「山のふるさと村」へ向かった。「星を愉しむ上で最も大きな障害となるのは、光害。その点、奥多摩には圧倒的に灯りが少なく、好都合なんです。ここ、山のふるさと村ではキャンプもできるので、一年中、星観察を目当てに人がやってきますよ。僕が一番好きな場所は園内の湖畔。ここでは河原に寝転がりながら360度、星空を愉しむことができるし、湖面には月や星がキラキラと映るのが美しい。遠く、東の空の方を見るとぼんやりと明るいのは、都心部の繁華街が放つ光のせい。反対に西の空は山梨方面で、真っ暗といったように、異なる空の雰囲気も同時に楽しめるんです。標高も

高い場所で600mほどあって空気もきれいだから、離島を除けば、雲取山などと並んで都内で最も星空が見やすい場所と言っているでしょう」

こう話すのは「山のふるさと村」でインタープリターを務める岩下和広さん。星空を愉しむ上で最も重要なポイントはと問うと、「変化を愉しむこと」だと答えた。「ただ、星をみつめて星座と照合するというのも面白いですけど、星の位置の変化と季節の移り変わりについて知ると、天体観察はより興味深くなってきます。たとえば夏の星座が落ちてきたから秋の到来を感じるとか、ベガス座がきれいに見えるからもう秋だなとか。秋には星の紅葉だけでなく、季節

の星座であるベガス座がひとつのお楽しみになってくる。こうして季節の変化を星座によって感じられるようになると、ただ夜空を見上げるだけでも楽しめるでしょう。また、ベア座、くじら座、ケフェウス座、アンドロメダ座といった星座が一望できる。これだけギリシャ神話の登場人物が一度に揃う季節は他にないんですね。王様のケフェウスやその妻のカシオペア、ベガスに騎乗したペルセウスなど、ギリシャ神話のストーリーを少しでも知ると、秋冬の夜空を見るのがより面白くなってくでしょう」

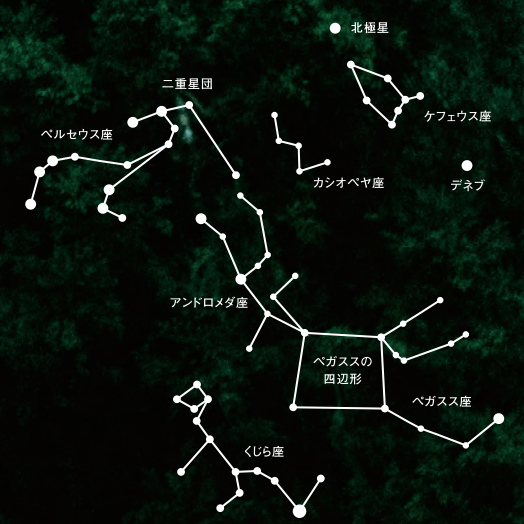
奥多摩の夜の愉しみは、星を見ることだけに限らない。星を求めて歩いている最中

の季節、際立つ一等星が少ないものの、豪華な星座のラインアップが揃うのも魅力だと岩下さんは言う。「秋から冬にかけてはペルセウス座、カシオペア座、くじら座、ケフェウス座、アンドロメダ座といった星座が一望できる。これだけギリシャ神話の登場人物が一度に揃う季節は他にないんですね。王様のケフェウスやその妻のカシオペア、ベガスに騎乗したペルセウスなど、ギリシャ神話のストーリーを少しでも知ると、秋冬の夜空を見るのがより面白くなってくでしょう」

も通っている道が全く異なる世界への入り口に見えたり、動物や草花の匂いを時折、ほのかに感じたり。ひとけのない静かな森は、神秘的な愉しみを次々と繰り出してくれるものだ。

「夜という時間はやっぱり人間の感覚を鋭くさせてくれるものなんですよ。ただど東京の中心部ではそんな体験がほとんどできない。奥多摩はそういうことにも気づかせてくれる場所だと、あらためて思いますね」

辺り一帯を包む、漆黒の闇。でもこの夜の暗さは、現代社会では決して“当たり前”じゃない。そう考えると、この暗闇の時間がどこまでも貴重で、とびきり贅沢なものに感じられた。





今日も二人で焚き火の時間。 毎日を丁寧に、ゆっくりと絆を深めながら。

奥多摩駅から徒歩約15分の高台に住む、高橋さん夫妻。山歩きの途中、たまたま見つけた家に魅力を感じ、11年前に移住してきた。それまで住んでいた吉祥寺や武蔵小金井といった街では、もっぱら外食中心の生活。夜は街で飲み歩くといったことも多かった。妻のまきさんは言う。

「でも奥多摩に来て、家で過ごす時間が増えたこともあって、途端に生活が丁寧になった。これまで雑に生きてたことに夫婦で気づいたんですね」

そんな二人に日が暮れてからの過ごし方を聞くと、「焚き火」という言葉が真っ先に返ってきた。夫の洋一さんは目の前で燃える薪を見ながらこう話す。

「山まで薪を拾いにいくとか、庭で薪の長さを揃えるのが趣味になっちゃって(笑)。季節を

問わず、毎週のように焚き火してますね。いつも合宿してるような気分です」

魚を焼いたり、暖を取ったりするだけでなく、静かに燃える焚き火を見つめるのが楽しいという二人。奥多摩に引っ越して以来、夜の過ごし方は180度変わったと洋一さんは笑う。

「奥多摩に住むようになったら寄り道もなくなって、夜7時位には帰宅するようになった。焚き火が終わったら、お互い、本を読んだり、パソコンいじったり別々のことをしてもいいけど、同じ部屋で過ごす決めてなんです。引っ越す前はTVもありましたが今は置いてないんで会話も増えましたね。焚き火のおかげじゃないですけど、夜をゆっくり二人で過ごすようになって、以前にも増して仲良しになりましたよ(笑)」

Profile

高橋洋一さん、まきさん夫妻／会社勤めの洋一さんとテキスタイルデザイナーのまきさん。ここ数年は、山登りに加え、自転車に熱中。休日は夫婦揃ってサイクリングに出かけることが多いとか。



Each Place, Each Style

奥多摩の夜の“それぞれ”

奥多摩初の自家製ビールを味わえる、 地元民御用達の古民家ブルーバブ。

奥多摩の新たな夜の楽しみ方として定着しつつあるのが、2015年夏にオープンした「ビアカフェ バテレ」だ。2015年12月には発泡酒醸造免許を取得し、2016年3月より自家製ビールの提供をスタート。観光客のみならず、地元民の憩いの場としても利用されることが増えたと、代表の鈴木光さんは顔をほころばせる。

「地ビールができてからは、夜もお客さんが入ってくれるようになりました。都心まで出かけてなくても飲める場所ができた、と地元の人にも喜んでもらえたのが嬉しい。以前は土日の集客がほとんどだったんですが、平日の夜も地元の人で賑わっています」

醸造責任者は、共同経営者でもある辻野木景さん。相方の鈴木さんをして「24時間ビールのことを考えているような人間」と言

わしめるほど、ビール造りにかける思いは熱い。そんな二人は、もともと高校の同級生。閉店後、夜な夜なビール造りに励みつつ、史上最高の一杯を目指して、二人でじっくり語り合うことも多いという。

「アメリカの家庭で造るビール製法を取り入れているので、一度にできる量は多くない。その都度、もう少し甘みを残して香りを強くしようとか、原料や配合、発酵の温度を少しずつ変えながら、毎回データをとって作っています。メニューの横にあるVer1.6という数字は、仕込んだ回数のこと。僅かな違いですが、味の変化も楽しんでもらえたら」

いずれは自宅で楽しめる、お土産用の地ビールを開発したいという鈴木さん。奥多摩の夜を豊かに演出してくれる立役者として、今後も目が離せなさそうだ。

Profile

Beer Cafe VERTERE (ビアカフェ バテレ)／奥多摩初のブルーバブ(醸造所兼店舗)。2016年3月より自家製ビールを販売開始。築70年の古民家を改修したお店は、雰囲気抜群。晴れていれば、外のウッドデッキでもビールを楽しむ。
<http://verterebrew.com>



ものづくりの夢膨らむ、 ジャジーでプレミアムな職人の夜。

数十年営んできた製造会社の代表取締役を退任し、第2の人生として奥多摩に住居と工房を構えたのが3年前。現在は、ウッドカナディアンカヌー職人として活動する山崎邦彦さん。仕事は日夜問わずしているが、カヌー体験や木工作業に追われる日中とは異なり、夜は仕事とプライベートの境目がない自分だけのリラックスタイムだと言う。「ジャズが好きで、学生の頃はビッグバンドのギター弾きだった。夜は図面を引いたり、事務作業をしたりとパソコンでの作業が主だから、ジャズをかけてお酒を飲みながらガラガラと仕事をしています。したい時に仕事をして、寝たい時に寝て、起きたい時に起きるんだから、昔じゃ考えられないくらい気楽ですよ(笑)」

もともと船舶操縦が趣味だったという山

崎さんがカヌーを造るようになったのは、「自分でも船を作ってみたい」という単純な好奇心から。誰かに教わった訳でもなく、唯一のバイブルとして洋書に掲載されていた写真を参考に作ったのが始まりだったという。1艇につき約200時間の制作時間を要するというカナディアンカヌー造り。その根底にあるのは、「ただ造りたいだけ」という純粋なものづくりの欲求だ。

「実は今、カヌーの他にも造りたいものがあるんです。発電用の水車とか、プロペラ風車とか。あとは、飛行機もいつか造ってみたい。夢物語と思わるかもしれませんが、割と本気なんです(笑)」

ジャズのリズムに包まれながら、次なる挑戦にも夢膨らませるプレミアムな時間。今宵も、幸せな職人の夜が静かに更けていく。

Profile

山崎邦彦さん／山崎工業(株)代表取締役在任中より小型船舶の設計を始める。2013年に奥多摩でカヌー工房を設立。小河内小学校、古里「森のcory」に工房を持ち、カナディアンカヌーの製作、体験、イベントなどを行う。
<http://www.craftmountainscape.wix.com/mountainscape>



夜は家族で、「新聞トーク」。 世界のノンフィクションから学ぶことは多い。

地元でも有名な木工職人の佐藤健一さん。約15年前、奥多摩に移住。新たな拠点には、多摩川を眼下に臨む絶景の場所を選んだ。一階は居住スペースと工房、二階は展示スペース兼レクリエーションルームという恵まれた環境で、家族4人、楽しく暮らしている。「もちろん仕事も大事だけど、二人の子供が小学生なので、今は目一杯、一緒に遊ぶと決めている。目の前の川ではカヌー、近くにはたぐさんの山があるんで家族での登山も大好きだし、自転車も趣味のひとつ」

家族で過ごす時間は都会の人々よりも多いはずだと胸を張る。健一さんと妻の恵美子さん。夜もちろん、家族揃っての夕飯がほぼ毎日のお約束だ。そんな佐藤一家が夜、しばしば行うのは「新聞トーク」。子

供たちに新聞記事を読み聞かせ、世の中の動きを教えていくのだ。健一さんはこう説明する。

「どうしても子供に聞かせたいニュースについて語り合う。お前と同じ年頃の子が今日の何時に、こういう状況で交通事故に合ったと。だから交差点では道路から遠くに立てよとか。国際面なら、同じ年頃の子がゲリラとして戦争に参加してるけど、お前は思うう?とか。科学のニュースなんかと一緒に読みますね。その日、実際に起きた事件や出来事が写真付きで紹介されているから、子供には強く印象に残る。新聞は最高の教科書ですね。子供たちも興味津々に聞いてます」

世の中のノンフィクションを家族で読み解く、奥多摩の夜。静かで、豊かで、楽しい時間が、ゆっくりと流れていく。

Profile

佐藤さんファミリー(健一さん、恵美子さん、泰造くん、龍造くん)／健一さんは木工、恵美子さんは革布縫製のエキスパート。注文家具工房「エミケン」では、二人の製作物が買えるほか、ワークショップも開催。
<http://www.emiken.com>





Hodgson's hawk-cuckoo
ジュウイチ

5月～6月に飛来する夏鳥。鳴き声が名前の由来で、「ジュウイチーイ」という声で夜も構わず鳴き叫ぶ。



Eurasian Scops-owl
コノハズク

かつては御岳山でよく声を聞かれていたが、近年、減少。夏鳥で、夜になると「ぶっばーそーぶっばーそー（仏法僧）」とも聞こえる鳴き声を発する。



Grey nightjar
ヨタカ

宮澤賢治の短編小説「よたかの星」で知られる。奥多摩を代表する夜の鳥であったが、現在は数が減少中。夕暮から夜明けまで、「キョキョキョキョ」とデジタルチックな声で鳴く。



Owl
フクロウ

奥多摩に数種いるフクロウのなかでも代表的なもの。「ほうこうぼろきてほうこう」とも聞こえる声で鳴く。姿を見つけるのは難しいが、鳴き声は一年中聞けるチャンスが。



Momonga
ニホンモモンガ

夜行性で、日中は木の巣穴で休む。ムササビと同じく滑空して木と木を移動するが、ムササビよりも小さく、往復ハガキサイズ。遭遇率は低め。



Japanese monkey
ニホンザル

昼行性なので夜は寝ている。木の上で2～3頭ずつ身を寄せ合って眠る。そばを通ると「クックク」という声が聞こえてくることも。



Giant flying squirrel
ムササビ

壁は木の穴の中で寝ていて、完全なる夜行性。巣穴の場所が分かっている場合は、日没後まもなく穴から出て、木へと飛び移る様子を観察することができる。



White's Thrush
トラツグミ

春の時期になると深夜から明け方にかけて、笛の音のような細い声で「ヒュー」「ヒュー」と断続的に鳴く。鳴き声が不気味なため、妖怪とも間違われ、鵺（ぬえ）、鵺鳥とも呼ばれる。



Bat
コウモリ

夜行性を代表する動物。奥多摩に生息するコウモリの種類は多いと言われるが、未だ不明なことが多く、近年、精力的な調査が行われている。

Looking to The Black Forest

夜の森、生物のいとなみ。

Yellow marten
テン

主に夜行性で、日没とともに活動を始め、夜が明けるとぐらに入って休息する。低山から高山まで広域に生息。



Crow
カラス

日中は、有機物を片付ける「森のお掃除屋さん」として活発に行動するが、夜間は、ひと目に触れない森の中でねぐらをとって休む。



Japanese serow
カモシカ

どちらかというと昼サリの動物だが、夜活動することもある。基本的に単独行動。10～11月には発情期を迎え、オスがメスを追う。名前で勘違いされがちだがウシ科の動物。



Wild boar
イノシシ

警戒心が強い。人間が活動している時間を避け、夜間に行動することが多い。活動的で長距離移動もなんのその。一晩で畑1つ分ほどの土を掘り返して餌を探す。



Moon bear
ツキノワグマ

朝や夕方にもっとも活動する薄明薄暮性のため、夜間は断続的に寝たり起きたり。主に12月～3月は冬眠期。



Deer
ニホンジカ

秋の求愛時期には、夜間、「ビューン」というオスの恋鳴きが森に響く。奥多摩の地元民の間では鳴き声が「かいいよう、かいいよう」と表現されることも。薄明薄暮性。



Fox
キツネ

主に夜行性といわれるが、昼夜問わず、断続的に寝たり行動したりを繰り返している。警戒心が強く、奥多摩の森で出会えることは稀。



Raccoon dog
タヌキ

どちらかというと夜サリの動物。ファミリーで行動し、人家近くでもよく見かけられる。



Weasel
イタチ

生活パターンは一般的に夜行性といわれるが、昼間も活動する。小柄な体格とかわいらしい見た目に反し、どう猛な肉食獣。水辺にすることが多く、目撃例も多々あり。

「全国的にも、大げさにいえば世界的に見ても、この森は貴重なんです」

長年、奥多摩の森の調査やガイドをしている田畑伊織さんに話を聞くと、開ロ一番、『世界』という超スケールのものさしが飛び出てきた。「先進国の首都に霊長類が暮らす森があること自体、世界的にも極めて稀。さらに、これだけ都市に近い場所にありながら、奥多摩には、シカ、カモシカ、イノシシ、ツキノワグマ、そしてニホンザルが暮らしています。5種類もの野生の大型動物が、一つの森に生息しているのは全国的にもとても珍しく貴重なことで、森の豊かさを物語っているんです」

奥多摩の森が豊かな理由には、大きく2つの要素が考えられるという。1つは、本州のちょうど真ん中に位置し、北と南の森の要素が合わさった環境だということ。2つめは、町内だけで1700m以上の標高差があること。そうした環境の独自性が、多様性のある生物層をも生み出しているのだ。

ハイキングや自然体験など日中のアクティビティで、この森の豊かさを感じることはもちろん可能だ。ただ、森の息づかいを静かに感じたいのなら、夜もまた味わい深いと田畑さんは言う。「まずはろうそくの明かりだけで過ごしてみても、暗闇に慣れる。それで大丈夫そうなら火を消してみる。満月の夜は、森の中でも本が読めるくらい明るいですよ。慣れてきたら、月明かりを頼りに歩いてみるのもいい。視覚的なものが遮断される分、一歩一歩が慎重になり、行動がスローになるはずですよ。そうすると、感性が刺激される。聴覚が鋭敏になり、夜は湿り気があるから鼻も利くようになる。ちょっとした物音でもドキドキしたり、昼間よりずっと想像力が膨らむようになります」

視覚よりも聴覚を頼りにして、森を感じる感覚は新鮮だ。虫や鳥、動物たちが発する音や木々のざわめきなど、自然が奏でる夜の世界は、寡黙ではない。継続して耳を傾けていけば、時間や季節によって聞こえてくる音に変化があることも分かるだろう。夜には夜の、豊かな世界があることに気づかされるのだ。「生き物には必ず自分の住み処と自然での役割があります。専門的にはハビタットとニッチ、生息地と生態学的地位というんですが、生物が多様であればあるほど、生き物は棲み分けをして、共存しています。例えば山にはカラスがいて、死骸やゴミを食べるお掃除屋という役割を持っています。それを海に置き換えると、同じようにカモメがいます。場所を変えれば、別の生き物が同じような役割を持って存在していたりするんです。そういう棲み分けて代表的なのが、昼と夜。リスに対して、夜の生き物はムササビ。星のチョウに代わって、夜はガがいます。セミの声に代わって、コオロギの声が聞こえたり。そういう視点で見っていくと、夜の生き物の世界が少し理解できるかもしれません」

主に昼行性の人間からすれば、夜は沈黙の世界と捉えがちだ。でも昼と夜はけっして「静と動」や「優と劣」ではなく、単純に「表と裏」の関係性にある。馴染みある昼の世界と同じように、夜の森にも奥深い世界が広がっているとしたら……。体感してみなければ、もったいない。

夜の森を歩くためのアドバース>>
奥多摩町は、全域が国立公園に含まれる自然豊かな土地。ナイトハイクに選んだ場所については、ビジターセンターや「山のふもと村」に相談を。

Heads and tails ?

夜には夜の、森の世界

Profile

田畑伊織さん / 学生時代より奥多摩をフィールドにカモシカをはじめとした動植物の調査活動に従事して四半世紀。自然教育研究センター主任研究員として、奥多摩湖畔にある都立自然公園「山のふもと村」ビジターセンター主任、全国で環境教育活動の企画・運営・指導者の育成などに従事後、現在は東京の山と島をフィールドに、調査活動やインタープリテーション活動を実践。



おはつ情話

小河内・奥多摩にいた娘「おはつ」の物語。宵闇の中、キツネかタヌキが化けたものと誤解され、哀れな死を迎えたその場所は「おはつ」と呼ばれるように。

猫おどり秘聞

奥多摩町・檜原村、山梨県にまたがる三頭山。その奥地にある辺に夜な夜な集まって歌えや踊れやの宴を繰り広げる猫たちの話。

犬切尾峠

標高1379mにある「犬切峠」。夜道、木こりが山犬を退治しようとしたものの、切り損ねて尻尾しか落とせなかったというエピソードがその名の由来に。

八本松の狐

山を越えて買い出しに行ったひとりの炭焼きの話。夜道を戻っているところを何者かに化かされ、気づけば八本松の根元で眠り込んでいたという。

日帰り客が多い奥多摩の地に、町民でさえ、わざわざ泊まってみたく評判の宿がある。創業100年を超す、1日3組限定の老舗旅館「民話の宿 荒澤屋」だ。心づくしの料理やおもてなしにくわえ、客を惹きつける名物の1つが、夕食後、囲炉裏を囲んで行われる「民話の語り」である。語り部を務めるのは、三代目・荒澤弘さんだ。「お客さんにね、明日どこ行くね?って聞いて、御岳山つつたら御岳の話をしてあげる。奥多摩湖って言ったら奥多摩湖の話。そうやって行って見た景色の方が、ロマンが膨らむでしょう」

レポートリーは、約80話。35年ほど前、「民話の会」の仲間とともに一軒一軒を訪ねて聞き書きしながら、町中の民話を探し集めたという。

「最初は古い資料をもとに知っている人を訪ねて。相当数行きました。囲炉裏があった時代は盛んだったけど、ラジオやテレビが出て一気に民話の文化が廃れてしまった。伝承者がもうほとんどいなくてね。昔は、家族の憩いの時間であり、何よりの娯楽でもあったんだけどね」

語られる民話の多くは江戸時代～明治時代に発祥したものだというのが、最も古いものでは千年前にまで遡る。身振り手振りを交えながら表情豊かに語る荒澤さんの巧みな話術と、囲炉裏が醸し出すノスタルジー。それらがあいまって、いつしか聴衆はタイムスリップしたような感覚に陥る。森のふもとの小さな宿で、昔話に耳を傾ける静かな時間。そんな趣深い森の夜も、たまにはいいものだ。

The Storyteller

囲炉裏と民話と語り部と。



Profile

荒澤弘さん / 「民話の宿 荒澤屋」三代目。1986年に奥多摩民話の会を結成し、その後、絵本「おくたまの昔話 1〜3集」を出版。人気の遊歩道コース「奥多摩むかし道」の生みの親。地元小学校や町内外のイベントでも民話の語り部として活躍。
<http://arasawaya.co.jp>

夜には夜の楽しみがある。奥多摩で生まれ育ったフォトグラファー、大館洋志さんはそのことをよく知っている。ある時、撮影テーマを探していた大館さんに、ふと、舞い降りたのは「奥多摩の夜の表情」というアイデア。日中、展開する美しい風景とは全く異なる世界を撮ってみたくなったからだ。

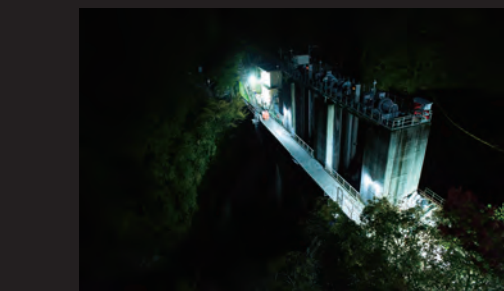
「観光地のような場所はほとんど撮影し尽くして、自分の中でテンションが上がらなくなってしまったんです。そこで自分の本当に撮りたいものは何だろうと考えた時、やっぱり美しいものが好きだなと思った。それでいて自分らしい奥多摩が撮りたいと考え、行き当たったキーワードが“夜”でした」

こうして始まった夜の撮影だが、その驚きは想像以上だった。知り尽くしているはずの町やダム、風景が全くの異世界に見える。当然だが出歩く人もいないし、鳥のさえずりも聞こえない。五感で感じる全てがガラリと変わっているのを感じた。

「ここに生まれ育っているが、夜の奥多摩がこれほど無音の世界なのかとあらためて驚いた。そういう状況だと、自分と向き合う時間が持てるんですよね。その感覚も心地良いなど」

そして次には、夜の森へ向かうように。闇に包まれた樹木の中ではこれまで見たことのない風景が撮れるかもしれない。そんな興味で森へ入ると、今度はまた新しい写真のヒントが舞い降りてきたという。「辺りは真っ暗で、払いのけようとしても次々と恐怖心が襲ってくる。森の奥へ入っていけばきっと良い写真が撮れるだろうと分かっているんですけど、色々なことを考え始めたらずが前に進まない。それほど無音の森っていうのはどうしようもない怖さがあるんですね。でも、この恐怖心も面白いなと思った。怖いというのは僕の正直な気持ちだし、そのせいでまだまだ満足できる写真が撮れていない。だけど、この怖いという感情を隠さず、さらけ出して写真を撮るとどうなるか、興味が出てきました」

美しく、怖さも感じさせる奥多摩の森の夜。そんなありのままの光景が写真になれば、間違いなく、人の心を打つものになるだろう。深い闇の中、森の奥へ、誰も知らない奥多摩の表情を求める大館さんの旅は、これからも続いていく。



Shooting Until Morning

「夜」を撮るひと。



大館洋志 Hiroshi Oodate

1981年生まれ。幼い時期を奥多摩、青梅で過ごし、06年の世界自転車旅行をきっかけに写真の世界へ。以来、自然の風景、人物、空撮、ウェディングなど幅広いジャンルで活躍しながら、拠点である青梅と奥多摩を行き来する毎日。
http://yorokobidokoro.singsong.jp

Spending Time With

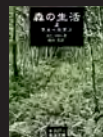
森の夜に寄りそう音、本、道具。



BOOKS

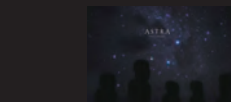
NAVIGATOR miguel.

本誌「BLUE+GREEN JOURNAL」を制作する編集チーム。ネイチャーからカルチャーまで、膨大な蔵書にまみれながら、奥多摩・大丹波に置いた拠点で日々、活動中。



ウォールデン 森の生活/H.D.ソロー

アメリカ・マサチューセッツの湖畔で2年以上、自給自足の生活を実践した詩人兼博物学者の記録。自然と共生するアイデアが満載の上、森への愛情に溢れる詩的な文体に惚れる。



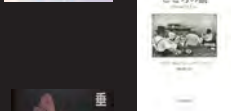
ASTRA/高砂淳二

日本を代表する自然写真家が撮った、世界の夜空の写真集。地球が宇宙の中の一つの星であることを実感できる圧巻のビジュアル。星空観察へのモチベーションもアップするはず。



Studio Journal knock/西山勲

世界中のアーティストを訪ねた旅の様子を、写真と文章で綴った美しい雑誌。現地で現像したというフィルム写真は味わい深く、静かにトリップ気分を味わいたい、森の夜長に最適。



こころの眼/アンリ カルティエ=ブレッソン

完璧な構図と決定的瞬間を実現する、20世紀が生んだ巨匠によるエッセイ集。天才写真家が真摯に訪いた写真論は、あらゆる人の心に刺さる。自然写真のヒントも満載。



垂直の記憶/山野井泰史

奥多摩在住のクライマー、山野井さんが自身の半生を振り返った名著。氏が経験した数々の登攀行を疑似体験できるとともに、山にかけるすさまじい情熱に心動かされる一冊。

MUSIC

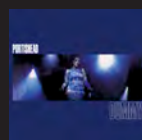
NAVIGATOR 船越章太郎+直美

奥多摩・氷川の人気店「蕎麦太郎カフェ」オーナー夫妻。夫の章太郎さんは楽曲制作、演奏を手掛ける現役ミュージシャンでもあり、妻の直美さんもマニアックな音楽好き。店では時折、音楽イベントも開催。



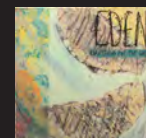
Blue Bell Knoll Cocteau Twins

幻想的な夜をイメージ。「A Kissed Out Red Floatboat」を聴きながら夜の白丸湖にカヤックで浮かびたい。



Dummy Portishead

エレクトロニカの傑作は秋にぴったり。独特の世界観と沈み込むようなサウンドは、森の夜のドライブに最適。



Eden Everything But The Girl

気たるいヴォーカルが秋の夜を彩る。親しい人と、焚き火を囲んで語らう際のBGMにいかが。



Random Friday Solar Fields

宇宙に連れて行ってくれそうな、スケールの大きなサウンドに魅せられる。月夜に大音量で聴きたい。



The Stranger Billy Joel

Navigatorの章太郎が心酔するこのアルバムは、場所、時間を問わず聞き惚れる楽曲の連続。奥多摩の夜に合う曲も多数。



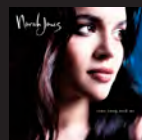
Andromeda Heights Prefab Sprout

星空の下で聴くならこれ。甘くメロディアスな楽曲で統一され、1曲目から、しつとりと落ち着いた世界に浸れる。



Strangers In The Night Frank Sinatra

一曲目が流れ始めた時から、時間を飛び越え、ノスタルジックな気分。静かな夜にフィットする、「染みる」アルバム。



Come Away With Me Norah Jones

グラミー賞を総なめにしたディーバ。聞いているだけで優しい気持ちになれる名曲揃い。ゆっくりと流れる森の夜の時間に。

GEARS

NAVIGATOR maunga

奥多摩フリークにはお馴染みの中古アウトドア用品専門ショップ(<http://www.maunga.jp>)。店内には、山や森の一日を豊かに楽しくするギアがズラリと揃う。御岳店、吉祥寺店を展開。



チェア ワンミニ/helinox

450gと軽量、コンパクトなチェア。地面に直接座ると寒い。秋冬、登山でも焚き火でも便利に使えて、長時間座っても疲れ知らず。

アルコールバーナー/trangia

燃焼音が少なく、静かな夜を楽しむのが大きなメリット。真鍮なので味が出てくるのも◎。超軽量で携帯性も抜群だ。

マグカップ/TOAKS

シングルウォールなので、そのまま火に掛けられる。チタンだから熱が冷めにくい上、超軽量。冬の夜を温めるお供に。

ダウンブーツ/MOUNTAIN EQUIPMENT

気温がグッと下がる秋冬に最適なあったかブーツ。手のひらサイズで軽量のため、ウルトラライトハイクにも最適。

ガソリンランタン/COLEMAN

キャンプといえばコレ、というくらい定番のランタン。デザインもかわいいで家の中でも使いたい。

WELCOME to OKUTAMA TOWN!!

東京の森林へ移住定住のススメ

都下での生活と自然豊かな環境を両立する奥多摩町では、移住・定住者を迎えるために、さまざまな支援を行なっている。住宅支援や子育て支援制度も充実しており、ファミリー世帯にも暮らしやすい町だ。

若者定住応援補助金

奥多摩町で住宅を新築、増築、改築、購入された方に、補助金を交付。事業費が50万円以上。事業費の2分の1以内、最大で200万円の補助。事業を実施後、1年以内のもの。補助等を受けることができる回数は1回のみ。対象者：年齢45歳以下の夫婦又は50歳以下の者で子ども(中学生以下の者)がいる世帯、若しくは35歳以下の単身者。

住宅資金借入の利子補給

奥多摩町に定住を目的とした住宅を新築、増築、改築、購入された方に、資金借入に対する利子補給を実施。融資金額500万円以上で償還期間が10年以上。借入利率の2分の1。年額30万円以内(給付期間36か月)。対象者：年齢45歳以下の夫婦又は50歳以下の者で子ども(中学生以下の者)がいる世帯、若しくは35歳以下の単身者。

子育て支援

【乳幼児】保育園入園時に係る費用の一部を助成、町内保育園に通園するお子さんの保育料を全額助成。医療費(保険適用分)を全額助成。

【小・中学生】入学時に係る費用の一部を助成。給食費、通学費、医療費(保険適用分)、中学生制服等購入費を全額助成。多子家庭またはひとり親家庭の学童保育の育成料の全額または一部助成。

【高校生】進学時に係る費用の一部を助成。通学費(定期代)、医療費(保険適用分)を全額助成。通学の送迎にタクシー料の一部またはガソリン券を助成。

その他

いなか暮らし支援住宅、空家バンク制度、安く家が借りられる町営若者住宅、多子家庭の助成制度など、ほかにも定住および子育てにまつわるさまざまな支援を行なっている。

お問い合わせ：奥多摩町子育て支援・定住応援総合窓口(企画財政課内) Tel.0428 83 2360 <http://www.town.okutama.tokyo.jp>

Editor & Writer & Photographer: Yukiko Soda [miguel] Writer: Hiroshi Utsunomiya [miguel] Art director: Atsushi Kodani Illustrator: Toshiyuki Hirano

発行:奥多摩町役場 ※このタブロイドは、奥多摩町の「元気なまちづくり推進事業」の支援により制作されています
編集&制作:株式会社ミゲル 〒198-0101 東京都西多摩郡奥多摩町大丹波640 miguel@dg8.so-net.ne.jp <http://www.miguel-web.info>
BLUE+GREEN JOURNAL 03号は、2017年春、配布予定! ※奥多摩町内の各観光施設、JR青梅線各駅構内、都内協力店などで配布予定です。店頭などで無料配布にご協力いただける施設を募集中です。ぜひお問い合わせください。

